

# 博士学位論文審査要旨

2023年6月29日

申請者：山田範子（早稲田大学大学院教育学研究科教科教育学専攻博士後期課程）

論文題目：短期大学におけるストーリーマンガ教材化と「読み」の成立に関する研究

申請学位：博士（教育学）

課程内外：課程内

審査員：主査	幸田 国広	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士（教育学）早稲田大
副査	和田 敦彦	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士（文学）早稲田大
副査	町田 守弘	早稲田大学名誉教授	博士（教育学）早稲田大
副査	米田 猛	富山大学名誉教授	

## 1. 本論文の目的

本論文の目的は、短期大学においてストーリーマンガが教材としてどのような価値を有し、マンガを読み合うことで学習者がいかに「読み」を成立させていくかを明らかにすることにある。

解釈の構築は、学習者が学習材（教材）と対話することによって、主体的に言葉を紡ぎ出すところから出発する。佐藤（1995）は、教室には学習材との対話、他者との対話、自己内対話の三つの対話が必要であると指摘する。鶴田・河野（2012）によれば、学習材との対話が活性化されることで、他者との対話および自己内対話が促されるという。このように、学習材（教材）と対話することによって紡ぎ出された言葉は、他者と交流することによって、自己の内面への振り返りを促し、さらに新しい言葉を紡ぎ出していくと考えられる。

国語教育の歴史では、文学（文章）教材を用いて教室における三つの対話を活性化してきた豊かな実践事例が多く存在し、また、それらを対象とした先行研究の蓄積も少なくない。本研究の独自性の一つは、中学・高校時代の学びに不十分さを抱えたまま進学してきた短大生を対象に、学習者の実態に即して教養科目の中で試みた実践研究という点にある。短大のカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーには、教養やコミュニケーション力を身につけることが挙げられるが、現実には、多くの短大生が苦手意識を持っている文章教材だけを用いてこれらの能力を短期間で伸ばすことは困難である。こうした問題意識から、まずは教材のパラダイム転換を実践構想の基点に据えている。そして、町田（2009）などによって、中等教育の国語教材として扱える可能性があるとは指摘されているストーリーマンガが、短大の学習者とどのように絡み合うかを詳細に検討している。すなわち、短大を含む高等教育にとって、ストーリーマンガが果たす役割とはどのようなものか、また、教材化したマンガを読み合うことで学習者がいかに「読み」を成立させていくかを明らかにすることを目的とした論文である。

そのために媒材との対話のみならず、学習者同士の対話の詳細を発話分析等によって、具体的には、アンケート、先行研究および教科書の調査・分析によって整理した基礎的研究をふまえ、ストーリーマンガの「空所」に関する問いを解釈し合う授業実践における学習者の反応を考察することを主な研究方法としている。

マンガ教材化の意義と学習者の「読み」の成立の過程が明らかになれば、短大に接続する高等学校をはじめとした国語科との関連性にも光をあてることになる。その意味で、これまでの学習で自信喪失に陥っていた短大生が自分で読むことに積極的になり、それぞれの解釈を交流しながら自信を取り戻していく姿からは、本研究における教育実践がリメディアル教育としての側面も有していることがわかる。

## 2. 本論文の目次

### 2-1. 目次

はじめに

序章 研究の意義・目的・方法

第1節 研究の目的と意義

第2節 研究の方法

第3節 論文の構成

第1章 学習者の実態と授業で文学作品を扱う際の課題

第1節 高大接続における文学作品の扱いの課題と展望

1.1 本研究の対象となる学習者の特徴

1.2 学習者が経験した高等学校国語科を中心とした読みの交流の現状

1.3 本研究の対象となる学習者の読書嗜好

第2節 読者中心の文学教育の成果

2.1 太田正夫の十人十色を生かす文学教育

2.2 大村はまの単元学習

第3節 国語教育における読みの交流

3.1 イーザーの『行為としての読書』を視座とした読書行為論の整理

3.2 文学教材を読み合う学習の成果と課題

第2章 ストーリーマンガを授業で扱う意義

第1節 ストーリーマンガ教材化にあたって

1.1 「文学国語」での取り扱い

1.2 国語教育におけるリテラシーの潮流

1.3 高等教育とストーリーマンガの教材化

第2節 教科書における掲載マンガ調査

2.1 中学校・高等学校教科書に掲載されたマンガ教材

2.2 主教材として扱われたマンガ教材の分析

2.3 教科書教材より抽出したストーリーマンガの可能性

2.4 総括

第3節 ストーリーマンガを文学教材として扱った先行研究

3.1 実践史の検討

3.2 読みの交流を中心としたストーリーマンガの指導過程モデル

第3章 ストーリーマンガの非言語表現を話題とした読みの交流

—互いの読みを認め合うことを目指して—

第1節 月のコマに焦点化した「問い」を起点とする読みの交流

—吉田秋生『海街 diary』（小学館、2007）を教材として

- 1.1 教材研究－学習者の現状に即したストーリーマンガ教材－
- 1.2 授業の実際
- 1.3 学習者の解釈と解釈に対する考察
- 1.4 総括と課題

## 第2節 類似シーンの比較を通じた学習者の言語化能力と読みの交流

－松田洋子『ママゴト』（KADOKAWA、2011～2013）を通して考える

- 2.1 教材化の観点と教材研究
- 2.2 授業の実際
- 2.3 学習者の解釈と解釈に対する考察
- 2.4 学習者の感想から考える授業の成果と課題

## 第3節 ストーリーマンガを読み合う学習の可能性と課題

- 3.1 教材としてのストーリーマンガの特性
- 3.2 実践の課題

## 第4章 マンガの文法からテキストのメッセージ性へ昇華する読みの交流

### 第1節 高等教育で扱うマンガの文法

### 第2節 学習者が創造するストーリーマンガの文法－赤坂アカ『かぐや様は告らせたい10』（集英社、2018）の「空所」を巡って－

- 2.1 「空所」の再考
- 2.2 教材の価値と表現の特質
- 2.3 授業の実際
- 2.4 学習者の解釈と解釈に対する考察
- 2.5 根拠となるストーリーマンガの文法と教材化の基準

### 第3節 マンガの文法の意味づけからテキストの主題を探る－つげ義春『古本と少女』（筑摩書房、2008）の「空所」を読み合う－

- 3.1 教材の道徳的価値
- 3.2 授業の実際
- 3.3 マンガの文法（空所）を話題にした読みの交流  
－第2回授業における学習者の解釈と解釈に対する考察－
- 3.4 テキストのメッセージ性（空所）を話題にした読みの交流  
－第3回授業における学習者の解釈と解釈に対する考察－
- 3.5 ストーリーマンガの「空所」に関する「問い」の要件

### 第4節 実践の成果と課題

## 第5章 対話的学びを深めるストーリーマンガ－活性化の要因分析－

### 第1節 ストーリーマンガの「空所」はいかに他者との対話を活性化するか

－学習者の反応を通して考える－

- 1.1 学習者の反応調査
- 1.2 学習者が選んだ対話に効果的なテキスト
- 1.3 文章が対話に有効と考えた学習者の指摘
- 1.4 ストーリーマンガが対話に有効と考えた学習者の指摘
- 1.5 学習者の反応調査のまとめ
- 1.6 学習材との対話を促す可能性
- 1.7 他者との対話を促す可能性

第2節 ストーリーマンガを活用した対話の授業

－いくえみ綾『プリンシパル』（集英社、2011）を話題として－

- 2.1 『プリンシパル』教材化の意義とストーリーマンガによる対話
- 2.2 授業展開
- 2.3 学習者の解釈
- 2.4 対話の評価表
- 2.5 学習者の対話に対する感想の分析
- 2.6 学習者の解釈の変容と対話に関する評価

第3節 総括と今後の課題

第6章 ストーリーマンガの「空所」に関する問いは学習者の読みの磨き合いにどのように寄与するか －学習者の自己内対話を可視化する－

第1節 短期大学部の授業でストーリーマンガを読む

- 1.1 現代教養Ⅲ（文学Ⅱ）の授業意図と目標
- 1.2 教材研究－田島列島『子供はわかってあげない上・下』（講談社、2014）－

第2節 検証方法

- 2.1 全体の指導過程
- 2.2 一回の授業における指導過程
- 2.3 はじめの解釈のカテゴリー分類
- 2.4 終わりの解釈における反応型の分類
- 2.5 磨き合いの方向性に即した検討課題の抽出
- 2.6 ナンバリングと関連図の作成

第3節 「空所」に関する問いを解釈し合った結果

- 3.1 カテゴリー分類した学習者のはじめの解釈
- 3.2 終わりの解釈における学習者の反応型の割合
- 3.3 変容型の多い検討課題に注目した分析
- 3.4 持続型の多い検討課題に注目した分析

- 3.5 添加型の多い検討課題に注目した分析
- 3.6 相関図から見る学習者の読みの磨き合いの詳細
- 第4節 ストーリーマンガの「空所」の解釈と学習者の相互作用の考察
  - 4.1 学習者のはじめの解釈の多様性と読みの交流
  - 4.2 解釈の型から考える学習者相互の読みの磨き合い
  - 4.3 学習者の自己内対話の可視化
- 第5節 総括
- 第7章 評論テキストを介在させることでストーリーマンガの解釈はどう変容するか
  - 第1節 問題の所在と目的
  - 第2節 教材について－平和を考えるためのストーリーマンガと評論－
    - 2.1 こうの史代『夕風の街』（双葉社、2004）のマンガ表現の評価と分析
    - 2.2 中田健太郎「世界が混線する語り」『ユリイカ』（青土社、2016）の文章表現の評価と分析
  - 第3節 学習者の実態－読書嗜好と関連づけて－
  - 第4節 授業展開
    - 4.1 全体の授業展開
    - 4.2 ストーリーマンガの授業概要
    - 4.3 評論の授業概要
  - 第5節 学習者の実際の発言とプロトコル分析・考察
    - 5.1 被害者と加害者の対立を安易に固定化しないことに対する議論
    - 5.2 「原水爆禁止世界大会」のビラが風に吹かれているイメージに対する議論
    - 5.3 学習者の解釈の変容－「他者との対話」によって促される読みの磨き合い－
  - 第6節 学習者の解釈の変容に対する評論テキストの寄与
    - －学習者の「自己内対話」からの考察－
  - 第7節 評論テキストを介在させることによって、学習者の解釈は変容するか
    - 7.1 学習者の授業評価
    - 7.2 授業者から見た学習者の授業評価と考察のまとめ
  - 第8節 つまづきのある学習者の実態と支援
    - 8.1 つまづきのある学習者へのインタビュー
    - 8.2 高等教育の教養科目におけるストーリーマンガの位置づけ
  - 第9節 今後の展望－専門科目と中高への接続－
- 終章 研究の成果と課題
  - 第1節 研究の成果

### 3. 各章の概要

#### 第1章 学習者の実態と授業で文学作品を扱う際の課題

本研究の対象となる学習者の実態・特性を明らかにし、読みの交流がいかに学習者の実態に即して課題を解決していくことができるか考察することを目的とした。

第1節では、本学の設置者・学校法人稲置学園が調査したデータである「FactBook 2020 年度事業報告」等を参照し、学習者の背景や特性を調査した。また、平成30年度私立短期大学教務関係調査および佐藤（2018）の指摘をふまえ、他の短期大学と比較することによって、本学学習者の位置づけを考察した。この結果、本学は人物重視の入試形態で入学する学習者が多いこと、短大所在地である石川県の自県内入学率や自県内就職率が非常に高いことが明らかになった。また、学習者の高等学校までの国語科授業の実情と読書嗜好を調査するため、アンケートを実施した。高等学校国語科における文学作品の読みの交流では、一見、交流が行われているように見えても、実際は教員が用意した一義的な解釈に誘導する傾向があること、また、学習者の読書嗜好として、ストーリーマンガを好意的に捉える傾向が強いことも明らかになった。

第2節では、国語教育史において、教員が一義的な解釈に誘導する読解指導と対照的な立場にあった太田正夫の「十人十色を生かす文学教育」、大村はまによる学習者に文学的体験をさせるための単元学習に焦点をあて、その成果を考察した。文章教材によって、教室に必要な三つの対話である「学習材との対話」「他者との対話」「自己内対話」すべてを活性化できることを確認した。また、学習者に文学作品を楽しんで読ませ、鑑賞させるためには、その実態に応じた教材を用いる必要がある。

第3節では、イザエルの読書行為論における「空所」概念と、文学教材の「空所」を読み合う学習の成果と課題を整理した。「空所」の機能に注目し、「空所」が読者側の認識の疑いや更新をうながす相互作用について論じている。このような「空所」概念を取り入れた先行研究に注目したところ、文学教材を読み合うことで、学習材との対話を活性化することが明らかになったが、一方で、他者との対話を促す成果は必ずしも十分ではないと考えられる。

#### 第2章 ストーリーマンガを授業で扱う意義

第1節は、マンガを教材化した場合、どのような目標において、いかに読むことができるか考察することを目的とした。高等学校国語科「文学国語」の学習指導要領、OECD（経済協力開発機構）によるPISA調査と大学入学共通テストを照合したところ、絵・コマ・言葉で構成されるマンガが複数の形象を読み取るという目標および解釈の多様性を考察しながら読むことができる可能性が明らかになった。また、本学のカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーを取り上げ、高等教育におけるマンガ教材の意義を考察した。

第2節では、マンガがどのような教材として機能する可能性があるか考察することを目的として、中学校・高等学校国語科の教科書におけるマンガの取り扱いについて調査した。平成元年以降の中学校国語科教科書および平成15年以降の高等学校国語科教科書を調査したところ、四コママンガが、学習者に授業の目的を達成させるための主たる教材（主教材）として扱われる傾向が強いことを確認した。しかし、四コママンガに描かれるシンプルな画像では、画像の理解およびその理解を表現できることの育成にとどまる恐れがあった。一方、ストーリーマンガは、多くの形象を根拠として、ストーリーに即した多様な意味構築ができることが明らかになった。

第3節では、実際に短大の授業でマンガを活用できるようにすることを目的として、マンガを文学教材として扱った先行研究を調査した。指導過程を分析した結果、マンガの文法という特有の決まりに関

する「空所」を話題にすることによって、他者との対話を高められる可能性がある。先行研究の成果を応用し、「空所」にあるマンガの文法を話題とした読みの交流を行い、徐々に話題の抽象度を上げ、最終的にマンガのメッセージ性を話題にした読みの交流を行う指導過程モデルを作成した。

### 第3章 ストーリーマンガの非言語表現を話題とした読みの交流—互いの読みを認め合うことを目指して—

ストーリーマンガ教材を開発し、短大の授業で実践することを通して、どのような成果と課題が見られるか考察することを目的とした。

松本(2015)は文学教材の「空所」に関する問いを立てることが読みの交流を促す契機となると報告したが、この研究成果をふまえ、マンガの文法に関する「空所」について問いを設定することを試みた。吉田秋生『海街 diary 蟬時雨のやむ頃』と松田洋子『ママゴト』を教材化して実践したところ、学習者が複数の妥当な解釈を生み出せることを確認した。また、学習者が読みの多様性に気づいたことで、互いに解釈の自信を深め、読みの交流を楽しむことができた。

マンガは、絵の描き方がストーリー全体とどのように関わっているのか捉えやすく、内容と形式を結び付けて考えやすい。このため、すべての学習者が自分なりの解釈を構築することができた。考えを構築できたことで、他者との読みの交流に対して障壁がなくなった。また、読みの交流を通して、学習者相互に言葉による表現を高めながら、複数の妥当な解釈を交流することができた。

このようなストーリーマンガの教材特性と実践の成果が明らかになった一方で、マンガを教材化する場合、ストーリー全体を確実に読むことのできる完結した作品を内容的価値の精査とともに選ぶ必要があるという課題を見出した。

### 第4章 マンガの文法からテキストのメッセージ性へ昇華する「読みの交流」

マンガの文法に関する「空所」について問いを設定した授業の成果と課題をふまえ、第2章で考案した指導過程モデルを活用したストーリーマンガの授業実践を行い、あらためてその成果と課題を検討している。

19ページの短編でストーリー全体を読むことができる、赤坂アカ『かぐや様は告らせたい10』第95話を教材化し、読みの交流を行った。その結果、学習者からストーリーに即した多様な解釈を引き出すことができた。さらに、学習者の解釈とマンガ表現学の知見が一致するものが多数存在した。マンガ表現学では、作者が無意識のレベルで描いた表現技法をマンガの文法として理論化しているが、この理論を知らない学習者が、「空所」を意味づける際に紡ぎ出した言葉がマンガの文法と一致するとき、根拠に妥当性が加わった。実践を通して、隣り合うコマが一見無関係であるコマ(コマ群)やストーリー展開に影響を与えないコマ(コマ群)の中で、マンガ表現学による意味づけがある程度できる部分をマンガの「空所」とする教材研究の要点を見出した。

次に、つげ義春『古本と少女』を通して、第2章で考案した指導過程モデルのすべてを実践にあてはめ、読みの交流をするときの問いを、マンガの文法からテキストのメッセージ性まで高めることを試みた。この結果、実践レベルで指導過程モデルを扱えることが明らかになり、マンガの文法からテキストのメッセージ性に昇華するような問いを段階的に学習者に与え、解釈を交流していくことによって、学習材との対話および他者との対話を相乗的に促す可能性が高いことがわかった。

これらの授業実践の課題として、学習者の読みの交流がどのように行われたのか、どのように互いに読みを磨き合ったのか、その実態を明らかにすることができなかつたことが挙げられた。また、教材の価値を十分に明らかにできなかつたこと、「空所」を学習者に探究させる手続きをとっていなかつたことも課題と言える。

### 第5章 対話的学びを深めるストーリーマンガ—活性化の要因分析—

第5章では、マンガの「空所」に関する問いが他者との対話を活性化することが示唆されたが、何をもって活性化とするのか、学習者がどのような他者との対話に有効性を見出すのか明らかにすることを目的とした。

第1節では、学習者の反応調査を通して、学習者自身が有効性を実感する他者との対話の在り方を考察し、マンガの「空所」を問いとした読みの交流が他者との対話を促す可能性について考察した。約70%の学習者が、文章と比較してマンガの方に有効性があると判断した。第3章と第4章で検討した授業実践において、自分の解釈に自信を持って読みの交流に臨む学習者が劇的に増えた状況は、マンガの「空所」を解釈し合う学習が、学習者の求める他者との交流を促したことが関係していると推測できる。

第2節では、いくえみ綾『プリンシパル』を読み、「作者のメッセージを読み取れるところ」「表現に作者の意図を感じる場所」について対話し、観察者が聞き手の技能を評価する授業を行った。「相手の考えを解釈して自分の言葉で述べなす」、「質問して、相手から話を引き出す」ことの二点が対話を聞く技能の中で難易度が高いことが明らかになった。学習者相互に対話を観察したことによって、他者の発言を能動的に聞くことの課題を発見することができた。クラス全体の読みの交流に拡大する前段階として、少人数グループでの対話を経験させ、能動的に聞くことを学ぶ指導過程の必要性が明らかになった。

## 第6章 ストーリーマンガの「空所」に関する問いは学習者の読みの磨き合いにどのように寄与するか —学習者の「自己内対話」を可視化する—

ストーリーマンガの「空所」に関する問いについて、どのような読みの交流があったか、どのように互いに読みを磨き合ったのか明らかにすることを目的とした実践を行った。田島列島『子供はわかってあげない上・下』の「空所」を学習者自身が探究し、「空所」について読み合う全15回の授業実践を二年分分析した。

まず、読みの交流の実態を明らかにするため、学習者がたてた「空所」に関する問いにおける「はじめの解釈」を分類し、読みの交流を経た「終わりの解釈」がどのように変化するのか、ワークシートに記載された内容を分析した。その結果、「終わりの解釈」のパターンを変容型（自分のはじめの解釈が変容するタイプ）、持続型（他者の解釈を聞いて納得・共感したが、自分のはじめの解釈は変わらなかったタイプ）、添加型（他者の解釈を聞いて、その解釈を添加し、自分のはじめの解釈がより深くなったタイプ）に分類できた。また、学習者一人ひとりが互いにどのように影響を与え合ったか可視化するため、2020年度の学習者を1番から74番までナンバリングして相関図を作成した。相関図より、どの学習者も平等に解釈が認められるチャンスがあったことが明らかになった。

次に、どのように互いに読みを磨き合ったのか明らかにするため、解釈の変容パターンを規定する「問い」の特徴があるか分析した。変容型を多く生み出した問いは、考えがいきなり、画像を中心としたマンガ特有の表現を解釈の根拠とする傾向が強く、他者の考えを理解することによって自分の解釈の更新を促す特徴があると考えられた。持続型を多く生み出す問いは、難易度が高く、文字言語を中心としたマンガ表現の複数の具体的な形象を解釈の根拠とする傾向があり、他者の考えを共感することによって、自分のはじめの解釈を維持しながら他者の解釈を認めることを促した。添加型を多く生み出す問いは、主に画像を解釈の根拠として、他者の画像由来の根拠を含め、他者の解釈の道筋が自分と共通していたり、異なっていたりすることを理解できることによって、自分のはじめの解釈に他者の解釈を付け加えることを促すと考察した。ストーリーマンガの「空所」に関する問いは、特徴的に3つの変容パターンを生み出し、読みの磨き合いを支えていることが明らかになった。

## 第7章 評論テキストを介在させることでストーリーマンガの解釈はどう変容するか

評論を介在させることによって、学習者のマンガの解釈がどのように変化するか、評論が学習者のマ

マンガの解釈にどの程度寄与するか、変化しない・寄与しない場合はどこに障壁があるのか明らかにすることを目的とした授業を行った。

まず、マンガの解釈を交流した後、評論を読み合った授業におけるグループワークにおいて記録された反応プロトコルを分析した。その結果、学習者相互にマンガを読み合ったときには出てこなかった評論の解釈を一旦受け入れられること、あるいは学習者が互いに評論の受容を確認し合うことがきっかけになり、考えの変容が起こることが多いこと、また、読みの磨き合いは、他者とイメージの共有ができたときに促されることが明らかとなった。

次に、学習者が書いた批評文を自己内対話として捉え、評論を介在させた際にどの程度学習者のマンガの解釈に影響を与えるか考察した。評論の介在によって学習者の書いた文章の約 68%に影響を与え、評論が学習者のマンガの解釈の変容に寄与することがわかった。

最後に、マンガの解釈が変容しなかった学習者に注目し、どこにつまずきがあったのか考察した。その結果、読むことに対する煩わしさと内容を理解できないことが意欲低下に結びついていること、また、評論の抽象表現を他者に具体化されるというイメージの共有があることによって、読みの磨き合いが促されるが、つまずきのある学習者は自分の言葉で言い換えることが難しいため具体化しにくく、他者の具体化にも鈍感である傾向が認められた。

#### 4. 総評

高等教育としての短期大学の役割を果たすためには、中学・高校段階で身に付いてしまった学びの受動性や消極性を転換し、能動的に考えたり、進んで表現したり、コミュニケーションを活性化しようとする短大生の育成が必要になる。こうした問題意識から、本研究は、現在の短期大学生の実態を直視し、短大として求められる教養教育へと移行していくための方途として、教材観のパラダイム転換を図り、ストーリーマンガを主教材として位置づけ、どのようにすれば学習者同士の「読みの磨き合い」を促すことになるかを実践的に試みた労作である。

審査委員が特に評価すべき点として挙げたのは以下の三点である。

第一に、文学教育の歴史や近年の「読みの交流」研究と接合せながら、ストーリーマンガの「読みの磨き合い」実践を研究的な視点から試み、教材価値と学習者の「読み」の実態を明らかにした点である。すなわち、ストーリーマンガにおける表現手法の詳細な分析と、学習者の解釈との関係を豊富な事例をもとに分析、記述していったことに本研究の一つの意義がある。この理論化においては、国語科教材としてのマンガ教材史、マンガの文法と呼ばれる表象研究、学習者研究としての短期大学生の実態調査等の基礎的な研究を土台とすることで、実践場面で見られる学習者個々の解釈や学習者同士の交流の細部を多角的に検討する視座をもたらし意味付けを確かなものとしている。

第二に、様々なストーリーマンガのタイプと解釈や交流を促す「問い」の設定によって、学習者の解釈の実態が詳細かつ豊富に示され、それらが効果的な検討方法に基づいて意味付けられている点である。審査委員からのコメントでは、「これまでのマンガ教材による授業実践で、これほどまでに豊富な学習者の解釈事例を挙げているものはない」、「教材選択と交流の設定を工夫したことで、短大生の実態に即した教材との対話を創り出している」等、マンガ読者としての短大生の「読み」の具体を豊富に示したこと自体を評価する声が多かった。また、学習者個々の解釈を「変容型」「持続型」「添加型」と分類し、「問い」のタイプとの関連についての考察を試みていること、さらに、学習者の交流を発話分析から相関図を作成することによって、学習者同士の解釈の影響関係を可視化して「読みの磨き合い」がどのようになされているかを明らかにしたことは、ストーリーマンガを教材化した国語教育実践の研究 방법에大きな刺激を与えるものとなっている。

第三に、短大生という学習者の現在と学習歴を直視することによって、教養課程に求められている教育実践を構想し、実践研究を通して、中等教育における国語科教育の在り方への示唆を与える研究にな

っている点である。自分の意見を言いたがらない、穴埋め問題のワークシートにはよく取り組む、教師の解釈や解説を待つ姿勢が強い等、対象とする短大生の実態は中学や高校の学習歴の中で培われてきてしまった学びの習慣からなかなか脱却できない者たちであった。本論文は、こうした学習者に、自分の解釈や意見を述べること、述べ合うことそのものが「読むこと」の学習になるという気づきをもたらし、自信を回復させていく過程のルポルタージュとしても読むことができる。特に、苦手意識の強かった評論を介在させながらマンガの解釈を深めさせていく実践とその分析は、中学・高校の国語科授業にも大きな示唆を与えるものとなっている。

一方、課題としては、学習者反応分析のカテゴリー（上記三分類）の妥当性の再吟味、ストーリーマンガ教材と国語学力との関連の明確化、学習者と作品外の情報との対話の必要性等が審査委員から指摘されたが、これらはすべて今後の研究の発展への期待感を込めてのコメントであり、本論文の学術的な評価が変わるものではない。

以上から、審査委員一同、実践研究としての独自性、論証性、結論の妥当性等、総合的に判断して本論文が「博士（教育学）」を授与するのにふさわしいとの結論を得たので、ここに報告する。

以上